

音楽科オンライン授業研究会の課題と展望

——コロナ禍における音楽科授業研究会の事例分析を手がかりとして——

教育学科 高見仁志

抄録

本研究では、コロナ禍（2020～2022年度）において筆者が経験した音楽科授業研究会を、タイプ別に整理した。その中から、「授業録画型双方向オンライン授業研究会」と「メンタリング型個別オンライン授業研究会」の2事例をとりあげ、それぞれの展開を報告した。さらには、2事例における授業者・参観者の自由記述やインタビューを分析することで、音楽科オンライン授業研究会の今後を展望した。その結果、教師には「柔軟性とマネジメント力」「ICTの技術力」がさらに求められ、「価値観の改革」や「自身の気づきを高める遠隔メンタリング」の重要性が示唆された。

Key Words：コロナ禍、音楽科授業研究会、オンライン、メンタリング

はじめに

コロナ禍の2020～2022年度、学校教育は混乱した。とりわけ音楽科では、活動の特質上様々な制約に縛られ、日々困難に立ち向かう教師たちの悲痛な叫びが聞かれた。筆を執っている2023年3月上旬、感染者数は減少傾向にあるというものの、引き続きの感染対策が求められる等、状況は看過できるものではない。

こうしたコロナ禍を契機として、音楽科では新たな授業研究会のあり方が模索され始めている。そこで本稿では、「対面型授業研究会」、「ハイブリッド型授業研究会」、「授業録画型双方向オンライン授業研究会」、「授業参観型オンデマンド授業研究会」、「メンタリング型個別オンライン授業研究会」等、様々な事例を紹介しながら、中でも多くの課題や展望が見られた事例に焦点をあて、音楽科オンライン授業研究会の今

後を検討する。

1. コロナ禍における音楽科授業研究会の形態

筆者は2020～2022年度、以下の形態を備えた授業研究会の指導助言をおこなった。

- ① 「対面型授業研究会」
- ② 「ハイブリッド型授業研究会」
 - (②-1 「授業録画型双方向オンライン授業研究会」,
 - ②-2 「授業参観型オンデマンド授業研究会」)
- ③ 「メンタリング型個別オンライン授業研究会」

である。

上記、①「対面型授業研究会」は、コロナ禍以前からおこなわれていた授業研究スタイルである。研究会に関わる全ての者が授業の場集い参観し、事後に授業者と参観者が対面で意見

を交わす,といった形態をとる。②「ハイブリッド型授業研究会」は, 概括していうなら, 対面とオンラインが混在した形態の授業研究会である。これをさらに分類すれば, ②-1「授業録画型双方向オンライン授業研究会」, ②-2「授業参観型オンデマンド授業研究会」となる。②-1は, 授業録画を指導助言者が視聴して, オンラインで双方向のディスカッションを促進し指導助言をおこなうという形態である。指導助言者以外の参加者は, リアルタイムのオンライン配信で授業を参観した。②-2は参加者全員が授業を実際に参観し, 指導助言者とそのアドバイスをオンデマンドで配信するという形態である。③「メンタリング型個別オンライン授業研究会」は, ①や②のように多数の参加者を対象としたものではない。授業者と指導助言者のみが, マンツーマンによりオンライン上で双方向のディスカッションをおこなう形態である。

以上の形態は完全に分かつことができるものでなく, 例えば①「対面型授業研究会」の後に, ②-2「授業参観型オンデマンド授業研究会」や③「メンタリング型個別オンライン授業研究会」は併せておこなわれたし, ②-1「授業録画型双方向オンライン授業研究会」でも, 授業者と指導助言者のディスカッションは対面もあればオンラインもあるといったように, その形態は複数存在した。また, 多人数のオンライン双方向型で構成する授業研究会の成立も可能であった。このような多数で多様な研究会のうち, 今回は特に多くの課題や展望が見られた②-1と③をとりあげ¹⁾, 音楽科におけるオンライン授業研究会について論考する。

2. 授業録画型双方向オンライン授業研究会

2.1. 研究会の流れ

本研究会は, 以下の手順で進められた。

【授業前】

- ・授業の構想がA市音楽担当者研究会(計

10名)で,授業者を中心として進められる。

- ・授業者によって指導案が作成され,参観者(A市音楽担当者)と指導助言者(以降,筆者のこととする)に配付される。
- ・指導案以外にも,ワークシート,資料等が参観者・指導助言者に配付される。

【授業当日(2022年1月)】

- ・授業は1台の移動カメラで撮影され,リアルタイムのオンライン配信で,指導助言者を除いた参観者が授業を視聴する。授業の概要は以下の通りである。

題材名:いろいろな音のひびきを感じとろう

教材名:「茶色の小びん」

本時の目標:マレットの違いによる音色の変化に気づき,曲にふさわしい音色のマレットを選ぶことができる。

授業展開

- 1) 本時のめあてを確認する。
- 2) 前時に個人で考えた鉄琴と木琴のマレットの組合せを発表する。
- 3) 自分たちの演奏にふさわしい音色のマレットを選ぶ。
 - ・どのような理由でマレットを選ぶべきかについて,全体の場で考える。
 - ・グループに分かれて試し,選んだマレットとその理由をワークシートに記入する。
 - ・中間発表をおこない,各グループの工夫を全体で共有する。
 - ・グループに戻って話し合いを再開し,ふさわしいマレットとその理由を決める。
- 4) ふり返りを記入する。

【授業後】

- ・授業後,時間をあけず授業者と参観者による検討会がオンラインで開催される。

- ・ 検討会の意見が質問事項も含めて集約され、指導助言者に配付される。
- ・ 上記意見に併せて授業動画が指導助言者に配付される。
- ・ 指導助言者は授業動画や検討会の意見集約および質問事項を基に、アドバイスの論点を明確にして構想を描く。

【研究会当日（2022年3月）】

- ・ 授業者、参観者は、B小学校の一つの教室に集合する。
- ・ 指導助言者は、B小学校とは別の遠隔地（自宅）から研究会を進行する。
- ・ 授業者および参観者と指導助言者をZOOMでつなぐ。授業者および参観者のいる教室には1台のモニターとカメラが設置される（指導助言者からはカメラがとらえる範囲の授業者および参観者の表情が見える）。
- ・ 指導助言者がイニシアチブをとり、研究会を進める。
- ・ 研究会の論点としては、授業の全部ではなく、事前に届いた質問事項や指導助言者の気づきのあった場面が数カ所選ばれた。
- ・ 選ばれた場面の動画（数十秒程度）を流し全員で共有し、指導助言がおこなわれた。以下は、その時の動画の一部と指導助言のパワーポイント画面の一部である。図1にある通り、開始時には研究会の進め方、ルールを示し、その後、動画を流し問題となる授業場面を参加者全員で共有した。その後、意見集約にも関連させながら図2のような指導助言を提示した。こうした活動をくり返しなが、参加型のファシリテーションを実施した。

2.2. 研究会後の参加者へのアンケート結果

今回の研究会参加者の内訳は、次の通りである。

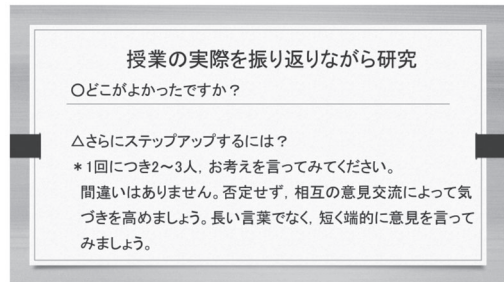


図1：パワーポイント例1（研究会の進め方）

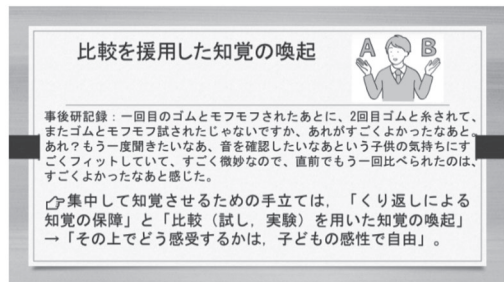


図2：パワーポイント例2（指導内容）

5年未満（1名）、5年以上～10年未満（2名）、10年以上～15年未満（2名）、20年以上～25年未満（1名）、25年以上（3名）の計9名であった。校種は、小学校（8名）特別支援学校（1名）であった。

この参加者に対して以下の質問（概要）をし、自由記述で回答を求めた。

- i) 動画を視聴するという『授業の事実』に基づいた授業検討会をした感想。
- ii) 遠隔授業研修会ではどんな工夫が必要と感じたか。今後の課題も含めて。
- iii) ファシリテーションに基づく参加型研究会を受けた感想。
- iv) GIGA スクール構想下の音楽科授業研究会の展望。
- v) その他

以上の質問に対する回答結果は次の通りである。

- i) 「授業の事実」に基づいた授業研究会この項目については全員が、今回のような授

業動画視聴後、意見交流することに意義を見いだす結果となった。その一例となる記述を示す。

- ・従来の授業者の反省、参観者の質問、討議の柱の意見交換、講師の助言では、授業の想起が難しいことや論点がずれてしまうことがある。今回のように焦点化したストップモーション方式の方がとてもよいと思います。

このように、従来型研究会の方法では論点がぼやけることを指摘する声は、多数存在した。

ii) 遠隔授業研修会で必要な工夫

記述例を紹介する。

- ・今回は指導助言者以外が、(全員)集まりましたが、集まる必要はないなど、感じました。
- ・受け手(受講者側)も、それぞれにChromeブックをもっていたら、答えやすいのか。でもハウリングして難しいのかとも思います。こちらも、スムーズに意見がいえる環境だと、相互の研修ではいいなと思いました。
- ・カメラワーク。受け手が発信する時の時間の無駄がありすみません。
- ・授業からだいぶ時間が経っているので、記憶がうすれていたのもう少し早い方がいいです。
- ・今回は、急遽の遠隔研修会でしたが、事前から遠隔研修会と決まっていたら、互いに都合をつけやすい日程に調整しやすいのかな、と思いました。
- ・端末の操作に慣れることができれば、より効率的に研修会が進められると思いますので、機器の扱いを勉強しようと思いました。

こうした回答から、技術的な課題や日程調整も含めた研究会のマネジメント力不足が浮き彫りとなった。

iii) 参加型研究会

この項目についても全員が肯定的にとらえて

いた。記述例を示す。

- ・指導助言者は「短い言葉で」などはじめに研修の仕方を提示してくださったので、参加型でも安心して受けることができました。
- ・新たな見解を教えてください研修は、映像もあり、パワーポイントもありで、おもしろく、充実した時間でした。
- ・今回の方が意見交流が活発になり、次への課題も明確になった。

他方、参加型ではなく講師の助言を聞くのみの、いわばさざかり型研修も意義があったとした記述も1件存在した。

iv) 音楽科授業研究会の展望

この項目の回答は、新たな世界に入っていくことの必要性を強調するものが多かった。例を以下に示す。

- ・今までのことができないから悲観するのではなく、あいた時間をこれまでできなかったことにあてると、新しいものが見えてきます。何事もプラスにとらえていきたい。
- ・はじめてのリモート研修で、やはり対面の方が臨場感もあっていいのではないかと感じていましたが、多くのことを学ばせていただきました。
- ・講師先生に遠方からお越しいただくご足労をおかけすることなく、環境さえ整えばどこでもできるというのがとても魅力なので、躊躇せずにどんどんとり入れていけばよいと感じました。

一方で、音楽科という音・音楽を扱う教科の特質上、オンライン研究会には限界がないか、といった意見も見られた。以下の通りである。

- ・音を大切にしたい音楽の授業研修なので、音をクリアに聴けるように配慮できたら、可能だと思いました。
- ・今まで通り、ではいけないですね。でも、本物(音)にふれるのも大切だ。

他には、双方向性を意識するべきだという回答も見られた。以下である。

- ・ 今後は講師の先生からの資料提供だけでなく、研修を受ける側からも資料を提示しながら考えを述べたり、質問できればよいかな、と感じました。

このようにはじめてオンライン授業研究会を体験した気づきから、今後を展望する意見が多く見られた。

3. メンタリング型個別オンライン授業研究会

3.1. 研究会の流れ

本研究会は、はじめから個別オンライン授業研究会が意図的に計画されたものではない。対面型授業研究会が進められ、その後研修会の指導助言をさらに深めるため、実験的に急遽、別日に授業者個人と指導助言者のマンツーマンでおこなうという形態がとられた。

【授業前】

2.1. の事例と全く同じ形でおこなわれた(紙幅の都合上ここでは割愛する)。

【授業当日 (2021年10月)】

従来通りの対面型授業研究会として、授業が公開された。リアルタイムの対面形式である。授業の概要は以下の通りである。

題材名：拍によってリズムを感じとろう
 教材名：「手拍子でリズム」「言葉でリズム」
 本時の目標：進んで「言葉リズム」づくりや表現活動に関わり、リズムのつなげ方に思いや意図をもって、友だちと協働しながらまとまりのある音楽をつくる。

授業展開

- 1) 拍によって、表現活動をする。
 - ・ つなぎソング
 - ・ リズムボックス、リズムリレー など
- 2) 本時のめあてを確認する。

- 3) グループで活動する。
 - ・ つなげてつくる。
 - ・ 通して演奏する。
 - ・ 表現を工夫する。
 - ・ 紹介。
- 4) ふり返る。

【授業後 (2021年10月)】

従来通りの対面型授業研究会として、授業者と参観者が事後検討会をした後、指導助言がおこなわれた。この後、指導助言者の提案により別日にマンツーマンでのメンタリング型授業研究会が実施される運びとなった。

【メンタリング型個別オンライン授業研究会 (2021年10月)】

- ・ 授業者、指導助言者は別々の遠隔地（自宅）から ZOOM によるミーティングをおこなった。
- ・ メンタリングを意図したミーティングは、以下の通り指導助言者のサポートによって進められた。
 - i) アイスブレイキングとして最初に雑談をおこない、心理的なサポート、考え方の整理、ロールモデルの提示、否定語を使わないことを心がけておこなう。
 - ii) 授業者のふり返り、授業でねらう箇所、核となる箇所、気づいてほしい箇所に焦点化されない場合は、そこに目を向けさせる。ただし、課題となる内容を助言者が一方的に指摘するのではなく、学習活動のその場を焦点化して示すだけにし、ここについて何か考えることはないか、たずねる。
 - iii) 授業者が発言することを種々受け止めた上で、ヒントや思考を活性化させる言葉を一方的にではなくラポールの成立を意識して与える。

3. 2. 研究会を終えた授業者の自由記述結果

研究会後の自由記述は大別して、①今回のメンタリングの運び方（話し合いの仕方）と、②自己の授業内容に関することに分かれた。①に関しては、集団での事後検討会のデメリットと今回のようなマンツーマンの話しやすさ、指導助言者への親しみやすさ、授業者の考えが尊重されることで焦点化したリフレクションが可能となる、といったことが述べられていた。主な記述例を以下に示す。

- ・これほど心安く話してもよいものかというほど、自分の思いを伝えやすかったです。一方、全体研修では人数割的に話してもよい時間配分や内容、みなさん配慮しながらなので伝えたい内容はあまり伝え合えなかったように思います。
- ・授業者に考えさせてくださるご助言のとり入れ方。「本時の指導をしていただいた」というよりも、先生（指導助言者）が本時で気になられた点について実践講座と関連させて自然と「考える選択肢を提案してくださった」印象を受けました。「褒めて」くださる＋「考えさせて」くださる、新鮮でした。これが今の子どもへの指導のあり方なのかと「また考えて」いました。一方、全体研修では授業後、間もなく考えこむ時間がなく、できたこととできなかったことが曖昧でした。音楽の視点と他教科にも共通する視点と、分けてふり返ればよかったと後から思いました。

②の自己の授業内容に関しては、全体研修では見られなかった熟考したリフレクションが特徴的であった。以下に記述例を示す。

- ・ZOOM（ミーティング）で改めて拍とリズムの大切さを思い返しました。歌の伴奏でも合奏でも、音の重なりがある時は、「どれが拍でどれがリズム？」と問いかけてみたいです。今回途中までしかできておらず

紹介できませんでしたが、「リズムボックス」の延長をしたいと思います。

このように授業者のリフレクションは、展望を伴った生産性のある気づきを喚起させたといつてよいであろう。

4. 総合的考察

今回の授業録画型双方向オンライン授業研究会、メンタリング型個別オンライン授業研究会、二つの試みを通して、様々な課題が浮き彫りとなった。ここでは、それを前者から3点（次節4.1, 4.2, 4.3）、後者から1点（次節4.4）とりあげ、音楽科オンライン授業研究会の今後を展望したい。

4. 1. 柔軟性とマネジメント力

予測困難な時代における音楽科オンライン授業研究会では、教師の柔軟な対応力とマネジメント力が求められている。今回の研究会は当初、完全対面型で実施される予定だった。しかしながらコロナ感染拡大の影響を受け、急遽遠隔開催となったのである。そのような困難の中でも、今回の研究グループには、遠隔でも開催しようとする前向きな姿勢がうかがえた。

一方で、研究会をマネジメントする力量が未熟であるという課題も残された。授業日と研究日の間が約2ヶ月もあいてしまったし、研究会の進行、ファシリテーションの実施は完全に指導助言者任せになってしまっていた。このあたりの力量を高めることは課題であろう。雲散霧消する音・音楽を扱う音楽科の教科的特質から、授業の一場面の動画を視聴してから検討する「授業の事実」に即したディスカッション」の重要性に気づけたことは成果であった。

4. 2. ICTの技術力

アンケートでも多くの教師が回答しているように、遠隔研究会に関連するICTの技術力が

未熟であることも課題として残された²⁾。ZOOMをつなぐだけでも、どのようなポジションにカメラを設定すればよいのか、音声を良好な状態にするにはどうすればよいか、等々、多くの課題が残された。さらには、授業撮影やオンラインで配信する際のカメラワークの問題も看過できない。カメラ担当の教師も回答していたが、何をフレームにおさめるのか、いわば授業場面のどこを切り取るのか、という点には試行錯誤をくり返しながらの力量向上が要求される。また音楽科という教科の特質から考えると、いかに本物の音に近づけるよう録音・配信するか、という点も大きな技術的課題となる。

4.3. 教師の価値観の改革

ICTの技術的課題ももちろんあるが、その基盤となる教師の価値観の改革にもふれておきたい。今回、オンライン研究会にも関わらず参加者は集合した。一堂に会したのである。このことによって、一つのモニターで指導助言者の画面を見たり、全く顔の映らない参加者もいたりした。この何かをする際は必ず集合する、という行動は、子どもの生命を守ることが第一義の学校において極めて重要である。他方、今後の組織のあり方としては意識改革の余地もある。集団行動盲信型から、集団・個別の使い分け型への転換も迫られる。こうした意識改革は、高度経済成長期型教育、いわばみんな同じの大量生産型教育からの脱却にも帰結することであろう。

このことに関連して、中央教育審議会（2022, p.23）は以下を強調している。

学校が、直面する様々な教育課題を克服できる組織として進化するためには、組織のレジリエンスを高めることが重要であり、構成要素の一つとして、教職員集団の適度な多様性が必要である。

このような集団に対する教師の意識を改革することによって、授業研究会のあり方だけではなく、例えば国際的には多く見られる「答えのない授業」への挑戦等々、多くの今日的課題解決の糸口がつかめよう。

ただしこうした教師の意識改革は、答申を发出するだけ、といったスローガンの提示だけでは成就しない。すなわち、今回のように教師が自ら体験し、そこで得た本質的な気づきによってのみ、真の意識改革は成立する。それほどまでに重要な教師自らの体験を保障するには、働き方改革による研究時間の保障、ICTインフラの整備、研究費の補助、等々、国家の政策が大きく関与してくる。意識改革を教師の側だけに押しつけるのではなく、政策としてどのようにそれを前進させるのかといった国家レベルでの取り組みが焦眉の課題となる。

4.4. 自身の気づきを高める遠隔メンタリング

くり返しになるが、今回の遠隔メンタリングは最初から企図されたものではなかった。全体研修では指導助言しきれなかった内容を伝えるべく、別日に設定されたものである。このミーティングは個別がゆえに、授業者の安心感を基盤として進んでいった。このことは、自分の考えがあってもなかなか発言しにくいという状況の回避を、我々に迫っているといえよう。このことに関して3.2. で紹介した自由記述では、授業者の本音が記されていた。

その記述とは、自己の指導方法を研究部会の一部の構成員から非難されたという内容であった。リズムに関する指導において、音楽科では唯一無二の正しい指導が存在するがごとの厳しい指摘を受けたという。授業者の指導方法は、その構成員には理解を得られず、授業者は今でも納得がいかない旨を記していた。授業者の自由記述から引く。

(〇〇さんのいう) 正しいか正しくないかではなく、「よさ」や「おもしろさ」を感じられる活動(授業者自身の気づき)を続けていきたいです。(括弧内筆者)

この記述内容は、授業参観者の強い指摘だけが飛び交うような、いわば授業者をへこませるだけの授業研究会に対し警鐘を鳴らしているのとらえてよいであろう。授業者はへこまされる対象ではなく、自らの気づきにより力量形成する権利を有している。このことに関して、F. コルトハーヘン(Fred A.J.Korthagen)は、ALACTモデル(図3)を示し、ふり返りによる授業者自身の気づきの重要性を強調している。

前述の授業者の本音「『よさ』や『おもしろさ』を感じられる活動を続けていきたいです」という一節は、ALACTモデルにある③の本質的な諸相への気づきに他ならない。こうした、信じていること、アイデンティティ、使命、といったより深い層での気づきを得ることも力量を高めるための大きな要因となろう。このような深い気づきを得るためには、前述のようなラポールのある状態でのマンツーマンの助言が効果的だと考えられる。

すなわち、教師自身の力によって得られた気づきを尊重しつつ、さらに本人が気づいていない課題を指摘し、3.2.で述べたような深いリフレクションを喚起させるメンタリングをおこな

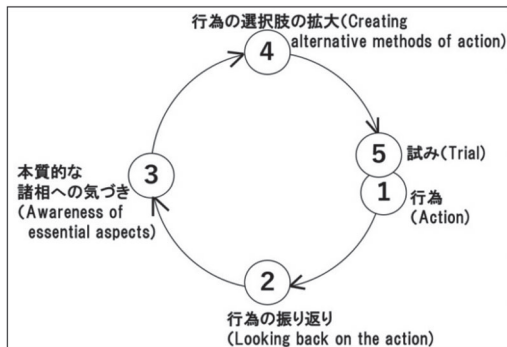


図3: ALACTモデル

うことが重要となる。このようなメンタリングは、全体研修のような固定されたコミュニティではなく、プライベートな空間、ラポールの成立した環境でおこなわれることが望ましい。この視点から考えても、遠隔メンタリングはオンラインの普及した今後の音楽科授業研究会にとって、重要な役割を果たすことが期待される。

おわりに

コロナ禍前までは希少だったオンラインの発想が登場したおかげで、授業研究会のあり方は飛躍的にその形態を変化させた。一方で、こうしたオンラインを採用した取り組みは、緒に就いたばかりで様々な課題を抱えている。この解決に向けては、前述のように、教師の価値観レベルの研究と日本の教育政策のあり方にまで切り込んだ言及が必要である。稿を改めて発表したいと考えている。

【註】

- 1) 2022年度 C 県小学校音楽教育研究大会に向けて、2021年度から多数の音楽科授業研究会がおこなわれた。本稿ではその中の事例をとりあげて、2022年『関西教育学会年報』における「コロナ禍における音楽科授業研究会の諸相」(高見, 2023)の内容を再分析・加筆しながら報告する。
- 2) 中央教育審議会(2022)では、「ICTや情報・教育データの利活用」を教師の資質能力の一つとしている。

【引用・参考文献】

木原成一郎(2007)「初任者教師の抱える心配と力量形成の契機」グループ・ディダクティカ編『学びのための教師論』勁草書房, pp. 29-55.
楠見孝(2012)「実践知と熟達者とは」金井壽宏・楠見孝 編『実践知—エキスパートの知性—』

有斐閣.

佐藤 学 (2015) 『専門家として教師を育てる
—教師教育改革のグランドデザイン—』岩波
書店.

砂上史子ら (2015) 「幼稚園4歳児クラスの片
付けにおける保育者の実践知—時期の異なる
映像記録に対する保育者の語りの分析—」『日
本家政学会誌』66, 1号, pp. 8-18.

高見仁志 (2014) 『音楽科における教師の力量
形成』ミネルヴァ書房.

中央教育審議会 (2022) 「『令和の日本型学校教
育』を担う教師の在り方特別部会 中間まとめ」
([https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/
chukyo/chukyo16/mext_01239.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo16/mext_01239.html) 閲覧日
2022.10.16)

Fred A.J.Korthagen et al. (2001) “*Linking
Practice and Theory: The Pedagogy of
Realistic Teacher Education.*” Lawrence

Erlbaum Associates. (邦訳 武田信子監訳(2010)
『教師教育学 —理論と実践をつなぐリアリス
ティック・アプローチ』学文社.)

Schön, D. (1983) “*The Reflective Practitioner:
How Professionals Think in Action.*” (邦訳
佐藤学・秋田喜代美 (2001) 『専門家の知恵：
反省的実践家は行為しながら考える』ゆみる
出版.)

Schön, D. (1987) “*Educating the Reflective
Practitioner : Toward a New Design for
Teaching and Learning in the Professions.*”
(邦訳 柳沢昌一・村田晶子 (2017) 『省察的
実践者の教育：プロフェッショナル・スクー
ルの実践と理論』鳳書房.)

〔附記〕

本研究は、JSPS 科研費 22K02506 の助成を
受けている。

(たかみ ひとし 教育学科)

